

⑪ 『御産物生糸取扱日記』より  
「<sup>はまたし</sup>浜出生糸凡<sup>およそのつもり</sup>積明細帳写」

慶応2（1866）年

この史料は、前橋<sup>ほんまち</sup>本町の磯田幸次郎（和泉屋か）・上泉村の高橋俊助が、前橋から横浜へ出荷する生糸総額と諸費用を見積もった計画書です。奥州・信州などから集まる生糸総額を1000駄（3万6000貫・代金120万両）と見積もるなど、当時前橋が生糸の一大集散地になっていたことがわかります。なお彼らは藩営直売所を設けた場合の見積もりも作っています。これは、明治2（1869）年前橋藩が横浜本町に敷島屋庄（正）三郎商店という藩営の生糸問屋を開設するのに先駆けた動きでした。

前橋市・松井家旧蔵文書 P01013 No. 49

右明細書  
一 金千五百兩也  
金五百兩也  
金千五百兩也  
引 金千八百七十兩也  
御冥加  
御冥加相増し候事

濱出生糸凡そ積り明細帳寫し

一 前橋生糸  
遠国生糸  
此の代金百貳拾万兩也  
此の運上・口銭とも 壹分六厘  
此の金壹万九千貳百兩也  
此の訳 金六千兩也  
御運上所納め

【史料①】

(前略)

浜出し生糸凡そ積り明細帳寫し

一 前橋生糸

合わせて千駄、当年出荷高  
遠国生糸

此の代金百貳拾万兩也

此の運上・口銭とも 壹分六厘

此の金壹万九千貳百兩也

此の訳 金六千兩也 御運上所納め

金千五百兩也 積 金

金五百兩也 召仕い給金

金貳千五百兩也 店諸入用

引き

金八千七百兩也 御冥加

但し荷数多分出し候節は、右割合を以て

御冥加相増し候事

右明細書

一金貳千五百兩也 店諸入用見込み

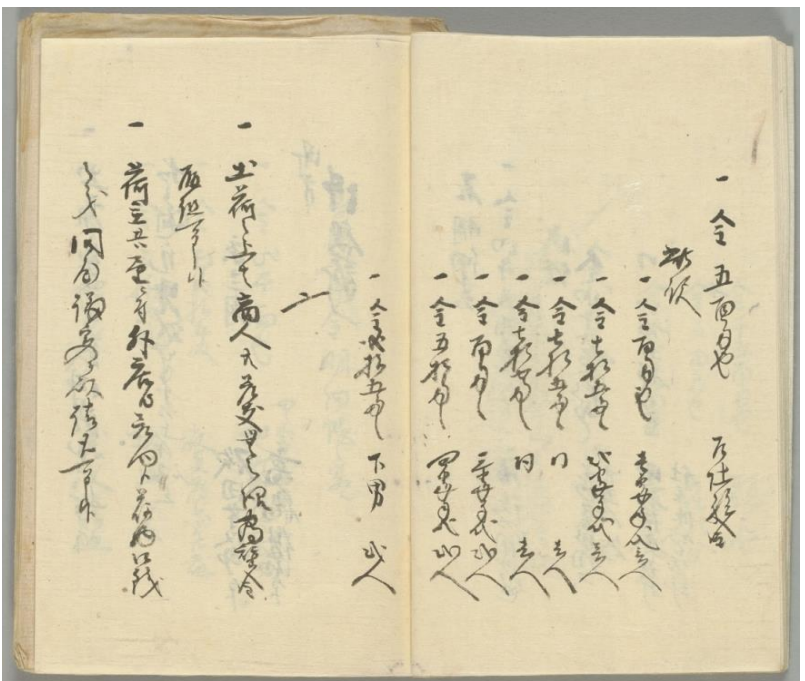
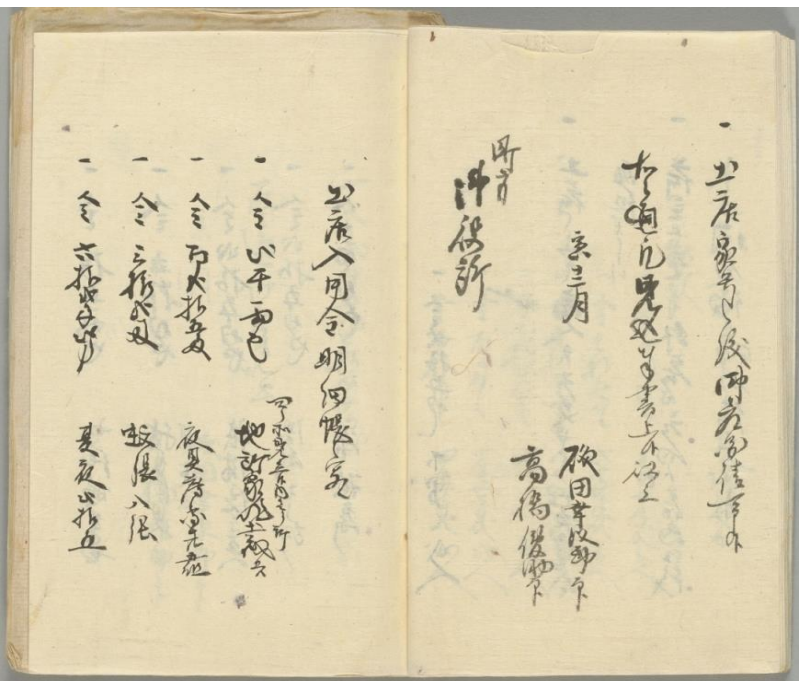
此の訳

金貳千貳百五拾兩也 荷主・家内共

同 貳百五拾兩也 廿五人賄い

町入用定飛脚

仕立て臨時飛脚



一 金五百両也 召仕い給金  
 此の訳  
 一金百両也 壹番手代 壹人  
 一金七拾五両也 貳番手代 壹人  
 一金七拾五両也 同 壹人  
 一金七拾五両也 同 壹人  
 一金百両也 三番手代 貳人  
 一金五拾両也 四番手代 貳人  
 一 貳拾五両也 下男 貳人

一 出荷の上は、商人ども差し支えこれなき様、為替金  
 取り組み申すべく候  
 一 荷主ども望みにつき、外店へ差し向け分荷物口銭  
 の義、問屋議定を以て請け取り申すべく候

一 出店家号の儀、御差し図請け申すべく候

右の通り、凡そ見込み書き上げ奉り候、以上

寅十二月 磯田幸次郎 印  
 高橋 俊助 印

町方  
 御役所

(後略)